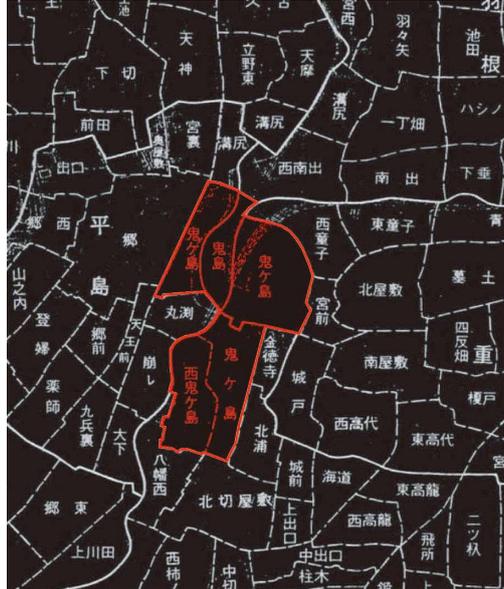


## オニはソト？

(断章“ノコギリヤネのある風景”その9)



▲一宮の鬼ヶ島（「丹陽の小字図」を加工）

ノコギリヤネの屋根上に佇む少女からオニの話聞いた。ノコギリヤネに棲むオニが逃げていくと家業が傾くという。そして、そのオニをカラスとトンビが奪い合うのである。（「ノコギリヤネのある風景・その5」）

家業の盛衰を左右するオニとは何だったのか。そして、オニたちはどこへ消えたのか。一宮市の東南部、丹陽中学校の南に「鬼ヶ島」の名を冠する公園がある。このあたりには、鬼ヶ島が字名として残っている。

『丹陽町史誌』には、「鬼ヶ島」と題する昔話が紹介されている。「昔、三ツ井の北から平島にかけての土地は、昼なお暗いほど一面に大松、小松が茂り、その真ん中は深い淵になって二筋の大きな川が流れ、気味悪い島を形作っていた……」とあり、ある冬の日、若者たちがその島に百燈をつける肝試しを行った。九十九人までは無事に帰ったが、最後の一人が戻って来ない。探しに行くと、燈明の下に八つ裂きにされた若者の死骸が横たわっていた。それから、この島は鬼が住む「鬼ヶ島」と言われるようになったという。

半年前の三月、桜の開花前、まだ肌寒さの残る頃であった。実際に訪れた鬼ヶ島は住宅地にあり、その名の付いた公園は、いささか拍子抜けするほど緊張感のない鬼をモチーフとした遊具とともに出迎えてくれた。この地から、ノコギリヤネのオニについて、何か見えてくるだろうか。

ノコギリヤネ（神奈川県藤沢市在住／のこぎり二にノコギリヤネ・コウバを開設）

## 1. 「鬼ヶ島」から青木川を遡る。ここは、一宮ではない？

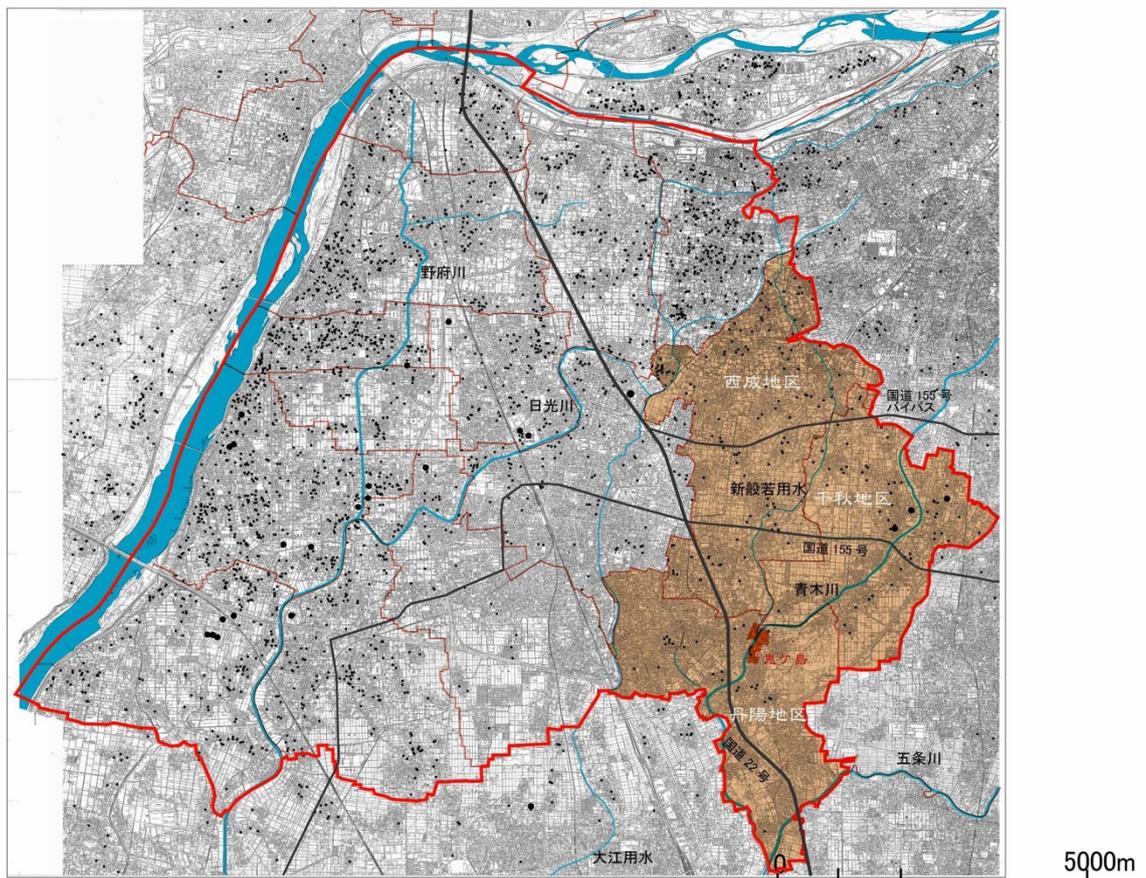
丹陽町三ツ井1丁目、丹陽中学校の南に位置する鬼ヶ島公園。住宅地として区画を整理し、道路、公園等を整備する際に命名されたものだろう。ほぼ100m西を青木川が流れる。犬山扇状地の伏流水を水源として、江南市を經由し、一宮市に入り、千秋町、丹陽町を経て、南端の市境で五条川に合流する。濃尾平野を形成した木曾八流の「二の枝(江)」と云われる。

一宮市の北と西、岐阜県との境を流れる木曾川から距離を置く丹陽、千秋の両地区は、ノコギリヤネが比較的少ない地域である。丹陽中学校の東、長福寺の山門前に小さなノコギリヤネを見つけた。その傍らで出会ったご婦人は、ここにお住いの方ではないが、「自分のところも昔は撚糸をやっていた。この辺りにもいっぱいあった」という。ノコギリヤネ全盛期の1975年、丹陽地区と千秋地区の繊維工場の数は、134と170。そのほとんどがノコギリヤネであったと考えれば、現在よりも「ノコギリヤネのある風景」を実感できそうな気がする。

国道22号の東側は「一宮ではない」と言われることがあるという。しかし、100年前、一宮町が一宮市になった時、この東部エリアに限らず、その周りのすべてがそうではないか。

にわかに、あの声が聞こえてきた。マスマダカラスだ。

それは、もともとのクニが違うということだろうな。



▲ 一宮東部エリアのノコギリヤネ (西成：126棟、千秋：56棟、丹陽：26棟)

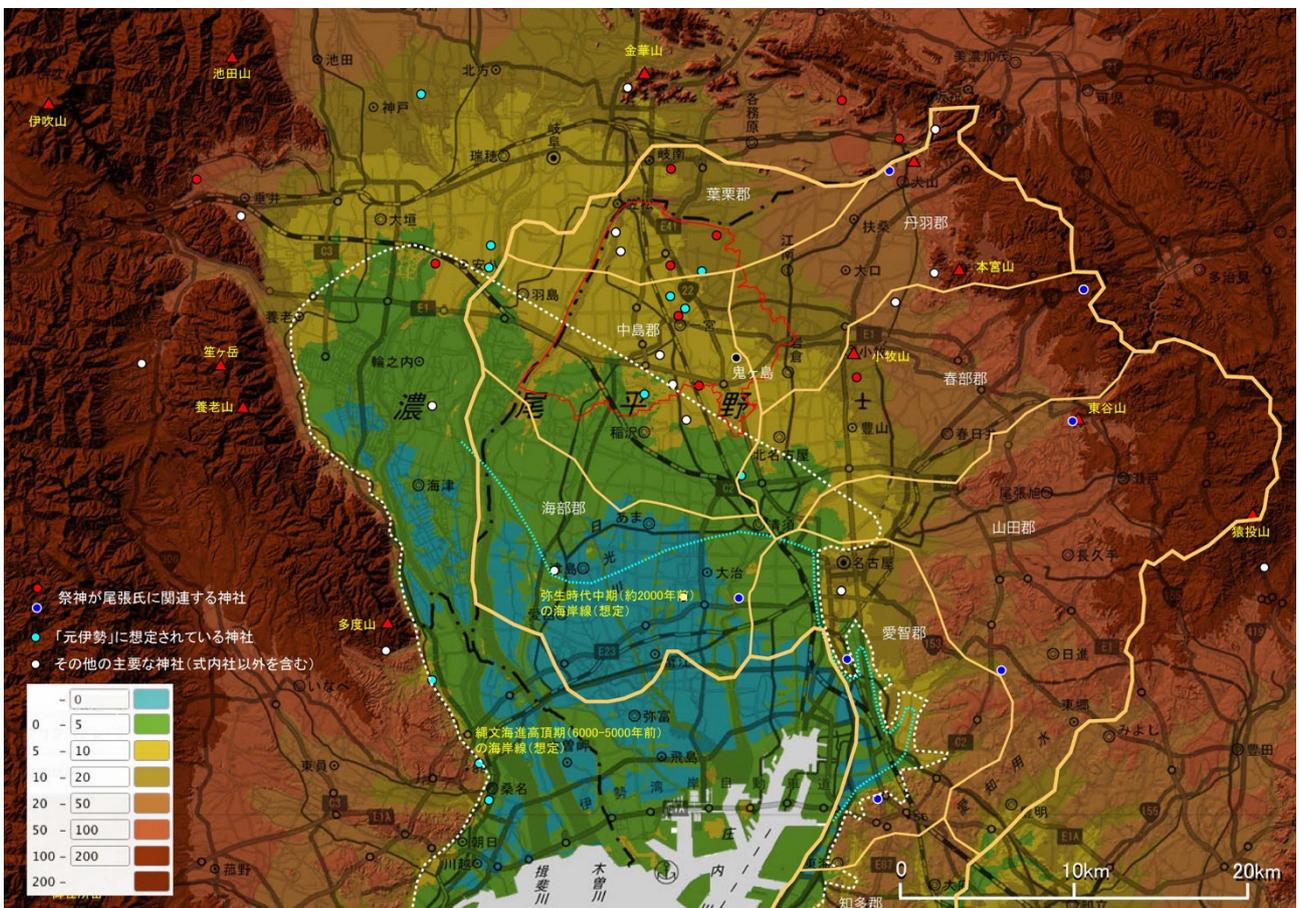
## 2. かつて、ここには、“ニワ”というクニがあった

古代、このあたりは、“ニワ”という強大なクニが支配していた。後に、熱田を拠点としたオワリ氏が尾張として統一することになるが、ニワ氏は古くから権勢を誇っていた。さらに遠い昔、稲作農耕文化を携え、伊勢湾から木曾八流を遡上した海民系の人々が、犬山周辺の台地の麓に生活の場を築き、ムラをつくり、先住民と融合し、強大なクニとなって栄えた。

律令制の時代、尾張国は、海部郡、中島郡、葉栗郡、丹羽郡、春部郡、山田郡、愛智郡、知多郡の八つのクニ(郡)から構成されていたとある。現在の西成、千秋、丹陽の地区は丹羽郡に含まれる。ニワとは丹羽のことか。国道22号と155号バイパスの分岐点周辺に丹羽の地名が残っている。爾波神社もその名残だろう。鬼ヶ島は、中島郡、丹羽郡、春部郡の三つのクニの境近くに位置している。まさに辺境の地。・・・ところで、マスミダカラス。なぜ、姿を見せない。

オレは、ここでは実体を持ってない。ここは、犬山の本官山を住処とする“ニワカラス”のナワバリだ。ニワカラスの身体は赤い。ニワのニは、ヤツらの大地に由来する赤い土を意味する。そして、名のごとく、もう一つオレたちと同じ黒い身体を持っている。それこそ、ニワ氏とオワリ氏の合体の証なのだ。

面白いな、ニ(丹)とスミ(墨)か。赤い方が実体で、お前と同じ黒い方は影ということか。



▲ 尾張国・八郡

### 3. ノコギリヤネのオニの正体

じゃあ、ここではお前の千里眼も使えないのか。ノコギリヤネから失踪したオニの手がかりがないかと、ここまで来てみたのだが。

ノコギリヤネの上に居た少女から聞いた話か。ノコギリヤネから逃げ出すオニをカラスとトンビが奪い合うという……。カー、一杯食わされたな。ノコギリヤネにオニはいない。あいつは、いつもはオニのお面を被っているけれど。

そういえば、古いセルロイドのお面を手にしていた。オニは、「隠(おぬ)」の字に通じ、隠れた見えない存在であり、「カミ」と同義だと聞いたことがある。本当なのか。

どうだろう。オニというのは、本来、恐ろしい存在の象徴だ。お前たち人間は、殺戮、飢饉、伝染病、あるいは地震、洪水などの大惨事の背後に、オニというこの世のものではない存在を仮想してきた。そして、共同体の秩序を脅かすものとして「他所者」や「異人」にも重ねた。イエの中には八百神でいっぱいだ。板の間には神棚、畳の間には仏壇があり、最も低い土間には土地の精霊がいる。後塵を拝した他所者は、まさに「オニはソト」だ。そこにノコギリヤネが現れた。お誂えむきに、ノコギリヤネの窓はカミたちの忌み嫌う北向きと来ている。他所者のあいつには格好の棲家となった。



▲ “オニ(?)”の棲みついたノコギリヤネ

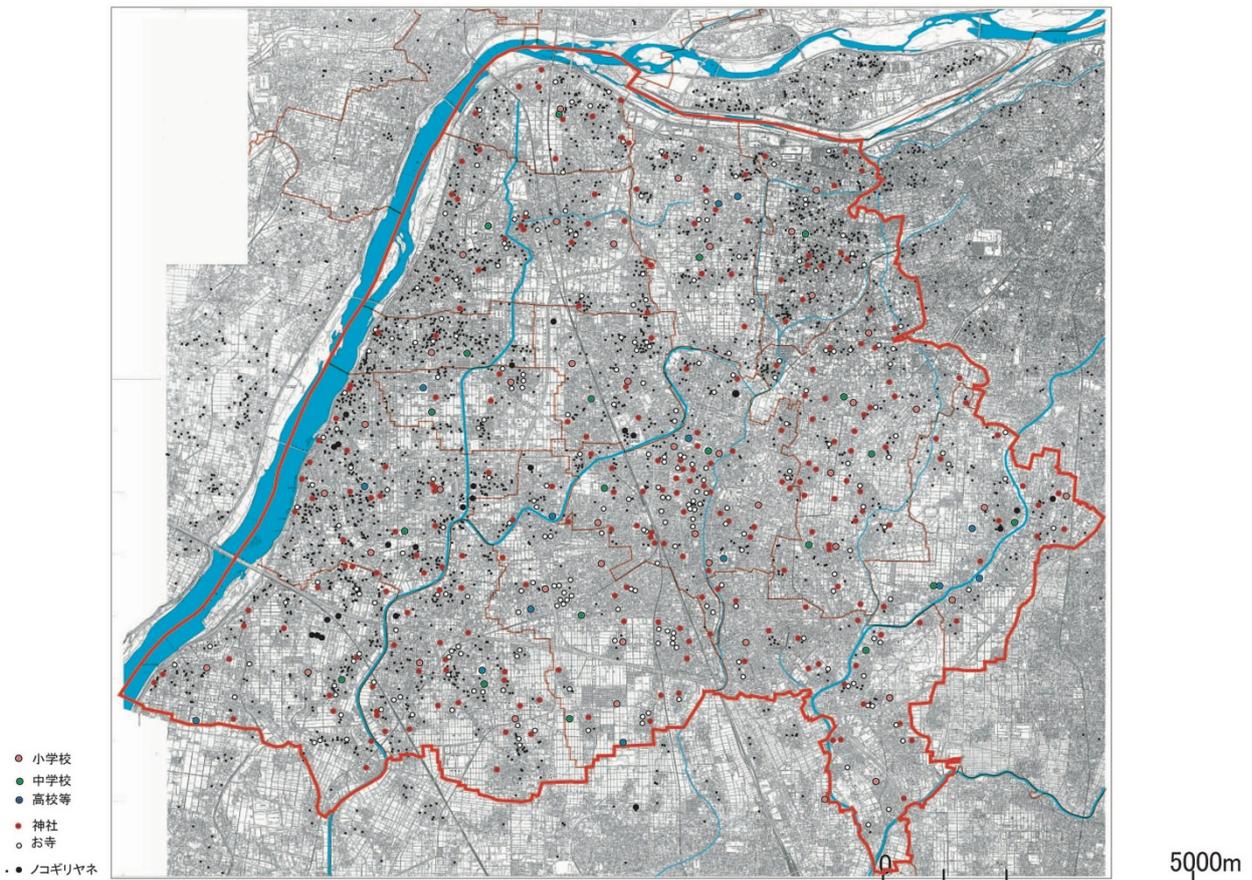
#### 4. 「ニワ」という「公場（コウバ）」

ついでに、もう一つ教えてやろう。ニワは、土間を意味する。ウチとソトをつないでおり、農家では朝や夜の仕事場となる。農家のソトは、現代では庭を意味している。土間は、「ニ」という赤土、あるいは石灰を混ぜてシックイにして地面を突き固めてつくる。そして、丸く車座になって農作業を行うのが「ワ」の状態だ。儀礼、政を行う場もニワにつながる。

土間を持ったノコギリヤネは、ウチでありソトでもあるわけだな。そして、「ニワ」でもある。かつて、工場（コウバ）が建ち、閉じていたニワ（ソト）が開いた。工庭（コウバ）だ。外から女工さんを招き入れ、特殊な家族を形成した。それが、農村共同体の地域を支えた。その後、地場産業が衰退、核家族化が進んだ。多くのノコギリヤネは閉じて行った。ノコギリヤネを開くということは、ニワを開くことか、活動の場として。そして、新たな拡大家族化の場として。

かつて、東の地に政(まつりごと)を司るニワがあった。時を経て、一宮の中心で「市場／市庭（イチバ）」というニワが開き、多くのヒト、モノ、カネを呼び込む場となった。

青木川沿いに8つの小中高校がある。学校には、「校庭」というニワがある。また、多くの神社、お寺とその庭。どれも人々が集う場だ。ノコギリヤネのオニを探して、クニ外れの鬼ヶ島に来てみれば、ここから、「ニワ」という「公場（コウバ）」が見えてきたということか。



▲ 神社・お寺、学校、ノコギリヤネというニワ

## ○エピローグ：丹陽から千秋へ向かう

丹陽町の鬼ヶ島公園を訪れてから半年が経過した。ノコギリヤネのオニ探しは、「ニワ」の発見につながった。マスミダカラスは、ノコギリヤネにオニはいないというが、どこかに潜んでいるような気がする。オニ探しは、まだ終わらない。

青木川に沿って、北に向かうと、千秋町の国道155号と交差する近くに、自家製の石窯で天然酵母のパンを焼く「サヴァシバ」というパン屋さんがある。実は、オニ探しの他にもう一つの目的があった。このお店を訪ねることである。パンを焼くご主人は、生まれたこの地で農業をやるために東京からご家族とともに帰ってきたという。岐阜から古民家を移築し、パンに使用する素材は自家製にこだわる。その日は、近隣の常連さんに混じって、木曾川を越えた岐阜県から来られた方もいた。前面の「ニワ(畑)」では、屢々、焚き火のイベントが催される。サヴァシバは公場だ。

地図を眺めていると予期せぬ発見がある。丹陽町の鬼ヶ島から、鬼門（鬼が出入りするとされる忌むべき丑寅(うしとら)の方角）である北東方向に真っ直ぐ進むと、犬山市の北端、木曾川がJR高山本線と並行して北上する左岸に桃太郎神社がある。鬼の鬼門に桃太郎がいた。

そして、鬼ヶ島から反対方向に伸ばしたライン上に立地するものがある(p3 図)。それは、一宮、ニワを含めた尾張統一、さらには遠くヤマトにも繋がってくる。舞台を南に広げて見ていきたい。鬼が出るか蛇が出るか。そして、どのような「ノコギリヤネのある風景」が見えてくるのだろうか。

本編の「ニワ」の着想は、郷土史家の小池昭氏による構想力溢れる著作に負うところが多い。ただし、言うまでもないが、ニワカラスは出てこない。

参考文献：『濃尾平野の歴史一 原始・古代篇』（小池昭、1982）

『濃尾平野の歴史二 古代の川と地名を探る』（小池昭、1995）

『遙かなる雲間に 尾張神話・他』（小池昭、1992）

2021.9.28（ニワの日になぞらえて）



▲ サヴァシバとニワ（畑）（サヴァシバのFacebookより）